



特 別
^5
6618



福系や

玄音乃柳

風吹草

露沾

十日とさすかきう 柳とみち

闇幽



六月廿二日 東山 奥行

我哀と夜籬りまふとくわ哉

言水

橋乃むらふにあらうこれ沙

沾洲

七夕れうの照り時卦とくく

我黒

鬻葉乃親そくううぬへはち

水色

梧の葉れ神あり落さる桶の中

白獅

尾を世話りすれ鶴鴿うさ備

竹宇

誰ういふ月うそかをれさわ火うち

序令

多きく下人忠行義新菰
 好春
 夏木立さいく難乃水く
 良昌
 釈迦がれ今の来り生れか
 言水
 幸に花をこめてハカ
 沾洲
 お針や姫若おわりと西く舞
 我黒
 燈臺へ枝合し海文入
 水色
 浦先く縁少んて是あり入猫
 白獅
 船人う風え中くけぬ下乃関
 竹宇

誓つるうく人忠行義新菰
 序令
 浅茅生れ時正くはり浦に居
 好春
 いお川まれちれ序やうる如箔
 水色
 裸身と雨と中よりうと月
 言水
 献上すく下帝これ飯
 沾洲
 それ乃勢いそく海幸雅樂助
 我黒
 呪文り東風乃と海踏鞠
 好春
 間り万う進うをいまといわさる
 百里

うきうきうきうきをきゆる檢校 朝叟
 ちくちくちくちく待のハハハハの扱人 其角
 ぶん公ん任きう任の條のけとがりあふ 清流
 せきくさへまつりますは舟の霜 序令
 糠入レ口より夕日海をゆき 栢十
 子に圖り先りあつる鏝とあつ 沾徳
 君れとまはりの帆ハ水にそそ石れ 琴風
 故もれよ筆れあつるれ椿の葉 嵐雪

飛しやきく鼻れ 出雲八重垣 其角
 結構をせぬと麋麻のあふひ也 青流
 桔梗城薙り先々水 悪水 沾洲
 三絃名半にうきうき布れ月 沾徳
 八艘名ひりらんてやくそく 琴風
 ひく名ひり名米りあつるあれはく 朝叟
 繩を繩りて檀所 荷うま水 栢十
 尋常に舳舳名ふ名ふ名心火串あれ 百里

小野より加持しつ町尻くく礼
 陸奥といひ行くハ南道とて天花粉
 傳変とてしつて難人主とて
 返事すもてしつて難人の事
 後家代を取てあつてつらん
 大名ハ誰ゆこつてより沈忠ハ川
 いちすゝあ奉こ乃月是打りまれ
 蕩蕩此熱リそ中つてこつてつて

其角
 序令
 嵐雪
 新真
 朝叟
 清流
 百里
 琴風

新ラ屋戸ハ花をりみらえ者ル名
 兼相れ草子ハ放下して組
 中免機無はつてつてりれきとて
 ちまけもしつてあつて面影
 黄蘗の下にわつて名乃行来
 大崎日志のうけいそつて銭
 玄ハト和コといひとてれあつてつて

栢十
 其角
 序令
 琴風
 甫成
 百里
 朝叟
 嵐雪

風情をあらやむ木曾乃尺一
 道粟城追粟可少く山おろし
 嶽出此そまに名世心うり
 有明まむい火はくる標り錠
 青豆そまう此之てはまもあり
 法これ比乃障子やありま任ま
 一雪ゆん少大穰乃耳
 世作法の魂乃之比天膏
 其角 序令 其角 琴風 清流 新真 甫盛 百里 沾德

飛う向くまれと霧り何われ
 髪結毎いけの玉藻此朝花よ
 鼈が引れすま此まの備
 貞室と志乃いまに股つて
 古粕の香れまらうや免ま
 畠山秩父のいへも噴礼
 神無ゆらるりらまをゆる
 あがり場れせんらまがら番坊主
 白獅 沾洲 其角 嵐雪 序令 朝叟 栢十 百里

子昂^リ下^リ今^入と^くる^れる^盆 青流
 手^心心^手鵲^の糞^状う^まく^こふ 琴風
 の^ぐぐ^目こ^んく^く 懸^榜吸^入音 沾洲
 標^とこ^れあ^らる^のゆ^らぬ^外科^鉄 嵐雪
 餌^王餌^一増^く月^毛乃^らら^の 新真
 ち^れち^れ人^を浮^田此^森若^狭 沾德
 乃^土や^産け^の暖^簾春^乃 卜^第一 其角
 藪^入と^鐘木^杖と^てい^さあ^れ 序令

借^裁付^れ法^手法^牙紙^一 竹宇
 ち^ちち^ちの^魚う^ちち^ちく^醒井^酢 水色
 二^乃湯^のゆ^めも^踊と^る夜^う 言水
 と^れち^ちち^ちち^ちち^ちち^ちち^ちち^ち 白獅
 箒^あつ^まこ^むが^ん乃^かり^し 序令
 遠^目目^くあ^らぬ^地緝^地と^うや^せ 竹宇
 悔^古を^くく^くぬ^う不^二忠^味の 我黒
 君^木下^に三^川四^川水^ちや^日ん 序令

饒

別

真節少しく春ももあつて
上方、後押いさくみ
中、あまのつひやあつて
玉座拾て舞ひこ祝し
袷の清くうらたはさきにさう

沾徳

伊勢へ見東よりあつて神子風

忠峰あつて蚊居り元り

序令

粉幸子ハ七曜やまのまきき

凍雲

山駕義たすくはやうく腰固 全阿

西よりぬ末廣買居何ものうを 栢十

島田より塚本孫系金谷丹其云々と
有れ入口の杉木の古用とくまう

瀬川屋守一 鶴此一背の阿あつり 百里

出望園より子ハの石此蠅もつてい 貞佐

赤心ゆきの中をうたわははあ新 甫盛

数く乃る系糸の流居時のお 新真

席令子入流はすまの比

垣若やし、釣ハ何けりやう山 東潮

馬依のう、流る矢利とあははつて 尺艸

去るものぞ乳く園を結足は袋 渭北

并一塵哉三思を念ぬや夏衣 專吟

右三句は法例くの送る

序令法例ちぬくゆりくきり
和歌のたより
やうきしきけりゆ縁かこさき

律宗門乃試れ法をみえ下進 嵐雪

掬 〇まこくくー教くー千一生 序令

出ろくくい歸去来れく世みり 朝叟

伊勢や尾張は海つくとさき

えくろまをともむひれぬ 專吟

多河波の蒲山ーさやこころん 艶士

阿を美ふみあわいの確く可ん十 序令

新田へ志る馬けくちまふ出りさ 沾徳

法事く円れ袴さる此 仙鶴

七夕れちみも綜安乃布月夜 朝叟

尻毛かー舞もみく爪印と対

関乃秋箱根此^峯福乃香乃りしつゆ
是を徒し一丈圖をらまきの足吟
夜をさあそく味嚼豆乃火く鏡立令
をさそく五月夜郷を代をり士
雪を乃ぬるれり控くくは物叟
はなれ終観く芭乃乃舞く
右眼卧のさそくを起し燈の了志
るお乃り思ひひり早縮や分入令

翁乃月みふれて毛ぬき柄をいひ
雁啼わくれり^鎌桑の市飾を士
みり蝶を物無^草法天を階子ぬ叟
山不姫乃りも片弁一の屋う門鶴
温飢桶世理くくゆまハまの凡叱
ふり此初くたくり橋乃小便令
醫者れ子みりる治命のらんお成士
心中死をしりぬ肥後鈍徳

飲酒多し吐をせしるるをいふ也
まろく置わし七寶乃簀
向歩尺二番八尺敷小夜の声
官筒乃貝流いかりひを鯨吟
木のまゝ人に維戸乃會下の馬啼令
我うめんくも延まのめく繩
おん切あしきり越ぬへ垣の月
居るまゝぬ四り枕巻喰わけ
露

阿ぶく多道後家乃り糸毛山田守
古筆免くれ下ハ書出ハ
名く此銚毛琴柱名雪乃中
汎経乃供此荷子さるる
是ハ正月物也やさ鍋代借ス向
家を西く相場聞一舟
露

首途をいさめく

朝更

中乃宰是のやけいあていあ

櫛の齒まうも栲のの水

序令

月弓と蛸は天宮の感しーの

沾洲

暮系毛ゆる初ぬるひつさ成

杉風

志のやハ乳母く離きよ櫛所

秋色

渡河の糸青糸成出さる水成

一更

一揮乃水此の糸も霜葉の成

板子

泰宮伊勢の内外に於て凡そ

序令

中これくまやをさるや西白石

遥拜所

鮎乃宵も照さゆる糸也五十翁

法所

櫛の川あていあていあ

糸のしれ出ま吸まのしとら

白神

うのれ女乃白く出さるひの故やう川 琴風
耳み手や雨や 糸さめふ蜂の声 其脛
地海りり此釣乃 せとくや秋虫蠅 貞依
く河ゆきく 茶屋のま婦の神何 提亭
舟の子此かあつて 出さや 蟹乃甲 府文

獨座

耳ふのこく 裾のく 縄此折 糸の 嵐雪
木くくく や男了 出さ 初瀬寺 羽尾花次 志英

あやしぬれの縮りくもちや 最上川 直水
あつき矢く ぬらひのきくわく 清風

旅かゝらと

初秋や 夏 瘦阿く 五六枚 田加鳥取 隣笛
菊漢綿 さいれく 一向甲 日 方節
百姓此腰く さいく 止倭 日加新庄
箱入乃 君毛 蒲葺や 約すれ 日 沾倭
糸く 天照山乃 種此色 沾凡

高ききしやして便に所ん

のれ矢乃箸成さくくや洗ひ鯉 朝叟

鴨乃先臨於さくく

松のさくく一齋院比乃や引と書屋 沾洲

活外

赤鱗れ尾中ぬれ所子く鶉 沾江

少くもく火れ新さく川のきあさくハ ちん

舟の子く一帯目かきぬぬれけ 撃水相何

十五

堂前の敷みと折るやのきけりく 同 左皮

法門席与なくま古りとも魚り
けれ海ありりまさくれおさく

手乃こく々松中あくと申の筆 三門 膏車

お豆いさくくは新 伊努若成 一和

愁時

く込くやくく毛、塵乃夜さむハ 古河 皆可

商家さくく調下く

意さくく浦はさくくくやむなは地 専吟

半乃葉毛かゝれ八寂——丹波口 序令
夏山や簾くあゝるれ多の言 沾洲

野——ま濃あうれ多

昼乃幙多氣此ま古く願ハ多け 岸令
考雨や養得るのハ杜乃母 專吟

病辭并病後

阿つさうぬあうぬ家のま迦とく 羽新庄
雨まりの力あうぬ果う那 沾滴
同 何為

七夕うまれぬまのハ鮫乃世 羽光
激やまのま根や 白帯 百里
去々奥や一刀流くまの志 一曲

潜見瀉 二句

す——まやまらまれまる浪 其從
や蟬乃声をぬし——あくれ波 沾洲
夕顔やさすこひ人毛器量な火 秋色
守山濃まうけ子ままれ阿雨ハ 其角

祇園をよーしあまの

風やあつたのちこーおー筒

京竹宇

うけ乃山ゆ種草けしけいれ

白獅

大井川乃一番越

五月雨乃金谷越投ー大相撲 全

毒くあまの社歌をぬけ彼
伊時乃むーをあまいぬ

あつた見越遊仙窟くーくーやぬ

序全

急みたらくく松乃ーくれ成

仙化

七

実舟は水にゆけ

あえのくくくあまの舟賣はゆき本園より

あまのくくくあまの真好伯益也あまのくくく神をぬ

巧僅貸秋や刺りぬあまのあまのーまはぬ

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

任吉ややれ塵風よ蜂乃声
白獅
氷雪ややれさうしお敷のまをゆる
百里
まほくもるん固情の山に百合の花
真依
松山乃りしう飢饉を麻のま
栢十

多國橋

涼うもろのれま後のま錢が鄙
朝豊
綿飛くし妻こ子真を下ま
其從
森眼や生まうけし本綿の利
仙鶴

中野杯懐九折

煙をまほろやぬのや黒木竈
法湖
傾城くし尺廻れ舟も野分ハ
ま流
夕月もや管根を新くはの音
序令

磨針峠

刺刀乃何れに涼し砥波山
白獅
草店をじまのりや
虎音
夢志おろしぬるぬる乃白露

了りし時采り星乃歌令
多れ可なりや流らるし芝の海
逆毛母風くくらるる海に福の
薄若くく夕良子月と抱あし
星くく幸親立ちく判法久
坐幕可く座中言ゆる神の月
一筋に星くく竟送るく舞
茶盤乃前にな舞喜のく文
湖 里 雪 例 令

日阿の微塵み残ほさぬく
鯛乃神くく阿く岩流し
鼻くく門き糸くくかみぬく
京深き山吹屋の由れ所便
恨くく阿くく赤流る葉に葉
帯袋約くくやハきぬ浪乃雲
先知くくや人をもあぬり
焼はきも大本れ浪の若物
例 里 雪 例 令 雪 里 例

病室に寂し〜らのまもを
 河内を〜り磯く〜津波を引り
 毛の丸人衾成に〜り壺折
 巽の卦乃龜ろ〜る玉の浦
 ちん〜り勸に〜る乃人
 一人のの羽をひらけ〜桐屏凡
 待や存心〜りす〜秋のそれ
 十三日卯〜り〜男も〜後路〜
 例 里 雪 例 令 雪 里 令

空

馬帽子より孰の始る〜り〜央令
 阿ま秘久〜四分去分〜り〜冥加里
 棒銘〜り〜是怪れ 垢 洲
 金山を造るぬ息も〜り〜盛 雪
 〜り〜濃新毛小節ハ百 令
 是乃新敷〜り〜り〜り〜り
 茶飯の松蕨をすれ〜り〜り
 名月ハ蜂もあ〜り〜ぬ梅の那 嵐雪

月不心在いそく無

律師少保相判城一ヶ月又ハ 其角

少き人きやもまひ中塔く
海堂の庭くう出て月城

詠くややいなひ
此後句

三井寺乃門多くくやけあ月 凡

名月のみくゆんくくを材木産 凡

くをくゆしぬ五寸れ橋く月んハ 吟

月乃下出の星乃くくく 艶士

二階のく下り多門 田子也報魚の月 沾徳

橋姫乃場くの雨衣うけよ乃月 甫盛

紙漉れ漸まくくくもせ月の者 秋色

いさくいろ、儒者少く名れり安之 キ角

南橋月下接字衣

布目地乃砧り声や後乃月 当次

ゆくや鯨乃口毛 子三長 其脛

平膝くく人の居やしも十三ヤ 青峩

山西氏物々々みみ〜ハ刻々々々々 專吟

七夕三句

神一室〜〜神のいのもや十童子 朝叟
昔〜〜や角豆も星の玉〜〜 其角

防鴨河使

妻織やく目〜〜乃河使 嵐雪
灯石寸利休の雪や 菖子の声 新真
ふ〜〜や〜〜ぬ〜〜の大井川 重代

雪中母是うた〜〜おほ乃 寿吟

利根川

菖子〜〜此鴨〜〜〜 鷺此純 百里

舟林寺〜〜小池

〜〜や雲に〜〜か〜〜鯉乃〜〜 席令

古田氏の遺跡

踏込や百年〜〜の〜〜乃秋 舟令
歩や〜〜〜〜〜教〜〜若王子 全

鹿島

官法に託りし侍けを也石乃可也 朝叟
 隗乃乃代鯉ノ我や神ノ一れ 提亭
 夕之也一雪ハ冷麻の鳩尾ゆえ 仙鶴
 向番ダ赤子毛鳩乃ノ一鳥ノ那 汴洲
 敦盛も波にあればや麦もけ 柏ノ
 麻の赤も多れさく有くくさ肉ハ 氷奴

重陽

正心何々此小瓜み煮り菊セ〜
 多々馬あや海乃手新〜鮭此魚 嵐雪
 鮎乃背此坐きた〜矢やけしの氣 巴人
 打わらん仕下屋あ乃たこのまゝ 青流
 菊新や物〜きき〜戌月夜 朝叟
 兼久乃垂徳腹か臆〜ぬさ袋 百里
 枝葉此物〜〜落多れ少終成 専吟
 時服花菊〜ハきくくの歌式 キ角

司此坊を住りしはんぢり
 風ふきし張子乃中に鼻と鼻
 いうれりきとを二代目此及
 ともたれ此畑のるりに胡麻は
 燈ぬつきとて城阿字観よるく
 下こい乃のよりの小寤て所法也
 ぬけしき波ちる百腰乃人
 町内へ玉ろへと捨るうらむに記

全河
 序令
 其角
 沾洲
 朝叟
 全河
 新真
 甫盛

七七

うすみ淋しくる河はあをぬく
 糸買此あもやへ来るも愛れ世や
 ちれ乃祿うの城門口此鐘
 唇くみよといさよの面八月此没
 小もれ緒すきくは内りいム
 塩分ふじ水風が子と法とく形
 園生りうらむあ。具此舌
 日ヶ寤ふりやてころり秘古鎗

白獅
 其角
 沾洲
 朝叟
 序令
 新真
 全阿
 序令

極り櫛く向く亦に雲付き 甫盛
あゝ粥も午に螺^カしぬ持病をま 其角
しらぬしらぬれり長崎のや^奴 朝叟
昔此葉の殊勝も成ぬやえん 沾洲
車やとりのお籠あげり 序令
昼乃月腰にゆるゆる水かえん 全阿
そ^敲いてあぐく末れま川山 新真
おりの車階子小思ひを縁のわ 甫盛

志留流あつさを幅幅のおり 白獅
南大底英だついとあつものよ 朝叟
二才中り入てあつかきこい 其角
去^梅みれは越え流や一と三 序令
好入機とそくをやくとつむ^奥 沾洲
久米此神とらつる指をまもる也 其角
ま^罷り作りく引くうんと衣 朝叟
鶴乃巢りかりぬのの口は光り 序令

六川下り出立と表連川勢 沾洲
 頃此峯人うら島の棒あつて 白獅
 うれぬし杉りへ故に此薪 甫盛
 袖と袖あ^摩れくくや中とれし 新真
 太真殿下りさ酒の香もれく 全阿
 采虫れりけ感いつたーれ 沾洲
 どりおろろかぬい^{發煩}のやの臺 朝叟
 髪ゆいの簀を負へる夏れ月 白獅

鞍轡鑽りし出月が小かき那 沾河
 子代萎しりりる花乃雪 翁
 漱濁もまのく^余ニ^余鈍なる人 序令
 家員^余越くは存へるをさの呼み子 其角
 うか冠ゆくをさ乃く月代 白獅
 二亭と始るみれ浦くゆまなり 全阿

お前なる中かそのの
 こやくく東海なるみたる
 母——て満尾

座禪石

笋乃のしよよくくこの中一足心 東雲

麥藁を山に培りしゆくにぬきぬ物 曉松

岩月や罫も歩さゆ夜乃落 横儿

初一を橋法所乃一帘一 因之

わけへのねる旅を架熟一云 湘水

瓢單く檜垣露けし髪とよ 仙芝

去病の羽片振子や 鶴乃霜 和泥

白梅を日数くしそれ何し此川 昔朝

宵乃蚊や様手此中のゆきれあ 九波

子ぬくも縹紙遊るれ黒さハ 風葉

阿ふ乃垂紙う流さゆ宮と朽本並 得水

月流し約乃いされさう孤原 新真

水仙を龜山及の書法 層 撃水

吉田山あきり

万引葉月如意と松川のさむり 弁宇

川年哉いふは初より下れ大根馬
 子る約
 まゝ思ふわまれのうらも油煙取
 帝後
 鼓の程うきまゝのうらも成
 山十
 流不乃の部「阿もまや水の仙
 仙風
 風乃のまもぬくまゝのうらも山
 朝市
 多のまもぬくまゝのうらも成
 仙我
 世のうらも山長姫も待まらぬ
 沾庭

やうゆり

文章乃文より阿也のれ姫小まの女

多のまもぬくまゝのうらも成

所々様成雪乃御茶の風 朝水
 氣れ多れとんちりもへまのうらも成 一平

画讚

し鳥をわろま巢と引いりのわろ 其角

全の上 まゝ

凡乃秋履ハ金谷塊のらあまは 沾庭

自画讚

芭蕉

わびしくまのま移くり麦れおるるを

古の雨のたのしみを
美くしうの物更なる

わび

冠里

菌王桐壺く根深きれくろく

これいま去れ秋の夕
このくひるもわかれ

榎草

源を流れおるくろくもものや榎草 治徳

初

秋山や 葎も色さひけりさ乃更 序令

本々

匹如身乃骨くろく色くや花原山 朝叟

推草

推く海く雨けくろく玉や菌之 白柳

柳茸

株朽く柳も冬に穢乃旅

專吟

天狗

多れ好み、遠ひの味也中善寺

南盛

松露

まのりくらくらり金剛粉や露乃玉

仙鶴

急ぎ

指くられ其尾より長く十萬騎

沿例

紅茸

山ありの中れ和巾をこられ紅粉

新真

針

古曰く紫くく地乃川

全阿

標第

林向み者焼まれ日御あきたの免

嵐雪

蛇もり

蛇塚より何處とて草菌さるひ

受松

茸狩十唱句

其角

其表 不二斑^{ナリカ}麿^カ茸^{キノ}

ら 蕈^{クホカニ}凹^ニ交^ユ白^ト杵^ラ

其抽 茸^ハ蠟燭^ヲ消^レ半^ハ

石突 角^{ホウル}仙^ヲ屠^イ角^シ蒂^キ

つゆ 笠^ハ回^ル菌^{キノ}獨^コ樂^ミ

燒松茸 松^ハ枝^ハ菌^コ返^リ報

七六

塩松^ハけ 不^レ香^ハ松^ノ雪^ノ漬^ケ

京^{キョウ}の^ハ一^ハ介^ケ也^ニ 蕈^{キノ}の^ハ文^ノ山^ノ雨^ノ重^シ

其賞 北^{マニ}見^ニ小^ノ松^ノ茸^ハ

秋^{アキ}上^ノの^ハ中^ニ 祝^イ宮^{ミヤ}崎^{サキ}生^イ茸^ニ

其餘^{キヨ}多^ク食^ヘを^レ解^ケ 朝^{アサ}叟^{ソウ}

吐^ハ赤^{アカ}青^{アヲ}滿^ミ手^テ 別^ベ種^{シュ}人^ニく^レく^レく^レ

猴^サ去^ク腰^ヲ懸^ケ赤^シ 同

さうぶのハ銀金乃のあをぬー
品題を玉を初まをくまの声のま
あはれま〜一帖をなすくれ予
遊のまをまを展る暇し愛
春末乃余白あま〜序金路に

甲申建子月日

京橋三條二軒
書肆 井筒屋庄五衛持

